

ドコモモ・ジャパンによる「関西大学千里山キャンパスにおける 村野藤吾建物群」の選定について

橋 寺 知 子

はじめに

2019年度、千里山キャンパスの村野藤吾設計による建物群が、ドコモモジャパン(Docomomo Japan)によって、日本を代表するモダンムーブメントの所産の一つとして選定された。本稿では、ドコモモとは何か、選定された千里山キャンパスの建物群の特色について記す。

ドコモモとは。

ドコモモ(DOCOMOMO)という団体の名称は、建築や都市に関心のある方であれば、聞きなれないものだろう。英語で、Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movementの略称であり、「モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織」と訳されている。

ドコモモは、1988年にオランダで結成された国際学術組織で、20世紀の建築における重要な潮流であったモダン・ムーブメントの歴史

的・文化的重要性を認識し、その成果を記録するとともに、それにかかわる現存建物・環境の保存を訴えることを目的としている。メンバーは研究者だけでなく、実務に携わる建築家や都市計画家、行政関係者など、幅広い分野の人々が参加している。1990年から2年に一度、総会(国際会議)が開かれ、モダニズムの建築の保存などに関してテーマを設定し、議論がなされる。現在、世界中の国々に64の支部(working party)が設定されている。

ドコモモの日本支部が、ドコモモ・ジャパン(DOCOMOMO Japan)である。¹⁾1998年、ドコモモ本部の要請に応えて、日本建築学会の建築歴史・意匠委員会のもとにワーキンググループが設けられ、活動を開始し、2000年に正式に支部として認められた。ドコモモ・ジャパンの大事な活動の一つに、「日本におけるモダン・ムーブメントの建築の選定」がある。選定を通して、日本の優れたモダニズム建築を発信し、保存の進展を促すものである。2000年に20の建築物を選定して展覧会を開催、2003年には80作品を加え、「100選」を発表した。近年は、毎年度10件前後の建築物を選定し、2020年3月

現在、選定建築物は226件を数える。今年2020年9月には、第16回の総会が東京で開催される。アジアでの開催は、2014年の韓国・ソウルでの開催(第13回)に次いで2回目となる。世界各地から研究者や日本のモダニズム建築に関心を持つ人々が集まり、日本の選定建築物も注目される機会となるだろう。

ドコモ・ジャパンが選定する「日本のモダン・ムーブメントの建築」とはどのようなものだろうか。「モダニズムの建築」と言えば、矩形で装飾がなく、シンプルで、地域性よりも世界的に共通性のあるデザインが想像されるだろう。だが、226件の選定建築物はかなり多彩である。建設年では1920年代前半の自由学園明日館(フランク・ロイド・ライト、1921年)があるかと思えば、1970年代後半のコンクリート打放しの住吉の長屋(安藤忠雄、1976年)もある。構造・材料は、鉄筋コンクリート造や鉄骨造が多いが、聴竹居(藤井厚二、1928年)のように木造住宅も含まれる。国立屋内総合競技場(国立代々木競技場)(丹下健三、1964年)や駒沢公園体育館(荻原義信、1964年)のような1964年東京オリンピックの施設群もある。代々木競技場のように挑戦的な構造のものもあれば、大阪新歌舞伎座(村野藤吾、1958年)のように、鉄筋コンクリート造で和風を強く意識した意匠のものもある。前述の聴竹居は、日本の気候や起居様式を科学的に捉え、計画に反映させた、言わば環境共生住宅であり、日本という風土への取り組みが評価される。選定された建築の幅の広さは、日本のモダニズムの建築の課題の多様性を示しているとも言える。

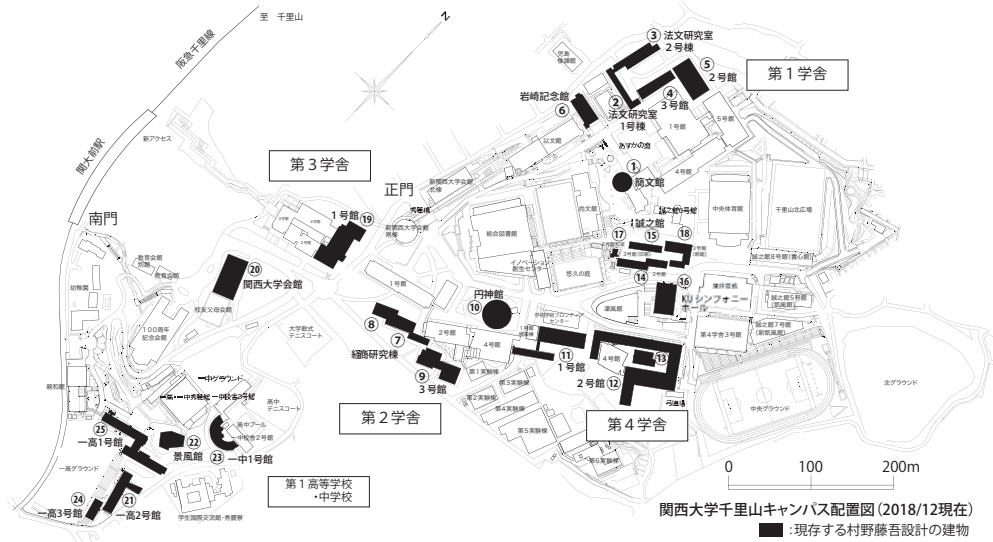
「関西大学千里山キャンパスにおける村野藤吾建物群」の特色

今回、千里山キャンパスに現存する村野藤吾設計の校舎群は、どのような点が評価されて選定に至ったのだろうか。選定された建築は、ドコモ・ジャパンによって「記録・評価書」が作成される。その記述にしたがって、特色を改めてみておきたい。

「記録・評価書」では、まず建築物のデータが明らかにされる。千里山キャンパスでは、村野藤吾の設計によって、1940年代末から1980年までの約30年間で約40棟が建設され、2019年3月の段階で、25棟が現存した。図1は2018年12月現在のキャンパスの配置図で、黒く塗りつぶした建築物が村野藤吾の設計によるものである。現存するのは約半数で、1980年以降、大規模な建築物も多く建設されているが、村野が計画したキャンパス・プランの骨格は保たれており、変化に富み、緑豊かで良質なキャンパス空間が成立している。

「モダニズムの建築」としての評価は、(1)技術性、(2)社会性、(3)文化・審美性、(4)歴史的背景の4点に整理され、記述される。

鉄骨造や鉄筋コンクリート造は、まさに近代の構造であり、20世紀はこれらの技術開発が進められた。「技術性」に関しては、千里山キャンパスの建物群は多くが鉄筋コンクリート造で、特に珍しいものではないが、屋根にシェル構造を用いた簡文館(図2)や、門型の柱梁の構造体で全体を支えるKUシンフォニーホール(図3)、16本の独立柱と中央のコアで円形の建物上部を支え、そこから鉄骨造の事務室が吊り下げられた円神館(図4)など、それぞれの場所に応じて、技術的



第1学舎エリア

- 1: 簡文館(図書館)(1955年)
- 2: 法文研究室1号棟(1955年)
- 3: 第1学舎(法文学舎)2号館(1967年)
- 4: 第1学舎(法文学舎)3号館(1967年)
- 5: 法文研究室2号棟(1967年)
- 6: 岩崎記念館(大学院新学舎)(1974年)

第2学舎エリア

- 7: 経済学部商学部研究棟(1966年)
- 8: 経済学部商学部研究棟(社会学部研究室)(1968年)
- 9: 第2学舎3号館(1967年)
- 10: 円神館(専門図書館)(1964年)

第4学舎エリア

- 11: 第4学舎1号館(1960年)
- 12: 第4学舎2号館(1964~69年)
- 13: 第4学舎2号館大教室棟(1964年)
- 14: 誠之館2号館(1962年)
- 15: 誠之館3号館(1962年)
- 16: KUシンフォニーホール(特別講堂)(1962年)
- 17: 誠之館3号館和室(1963年)
- 18: 誠之館3号館新館(1968年)

第3学舎エリア

- 19: 第3学舎1号館(社会学部)(1968年)
- 20: 関西大会館(1965年)

一高・一中エリア

- 21: 一高校舎2号館(第一高等学校校舎)(1953年)
- 22: 景風館(1955年)
- 23: 一中校舎1号館(第一中学校校舎)(1957年)
- 24: 一高校舎3号館(高中理科特別教室)(1966年)
- 25: 一高校舎1号館(第一高等学校新校舎)(1980年)

図1 千里山キャンパスに現存する村野藤吾設計の建物



図4 円神館



図2 簡文館



図5 第1学舎2号館



図3 KUシンフォニーホール

な提案が含まれている。

「社会性」に関しては、キャンパスの立地や周辺環境に意味がある。大正期以降、都心から郊外へ伸びる私鉄沿線には、郊外住宅地や学校などの文教施設、良好な行楽地が作られ、新しい暮らし方の提案がなされ、近代の文化的景観が形成された。現在の阪急千里線は、北大阪電鉄として1921年に十三―千里山間が、1925年には天神橋―淡路間が開通した。商都大阪の後背地である千里山丘陵一帯は、近代に開発された大阪の郊外の一つである。千里山キャンパスの西北には、北大阪電鉄の開通に応じて開発された千里山住宅地や花壇町の住宅地があり、現在の第3学舎・一高一中エリアは、千里山遊園と呼ばれた行楽地だった場所で、今もその名残が感じられる。1922年の関西大学の千里山キャンパス開設以来の歴史を継承しつつ、今のキャンパスが成立している。千里山キャンパスは、比較的開放的な大学キャンパスであり、近隣にお住いの方がキャンパス内を散歩する風景も見られる。地域社会と共にあるキャンパスと言えるだろう。

「文化・審美性」に関しては、建物群の意匠の多様性が挙げられる。設計者・村野藤吾は、日本を代表する建築家の一人であり、その作品は複数が重要文化財に指定され、ドコモにもすでに数多く選定されている。村野の建築は一つの型にはまらず、モダンな矩形のものもあれば和風建築もあり、細部を見ると、タイル貼り、掻き落とし、コンクリート打ち放しなど、建物のテクスチャーも多様で、階段やスロープ、窓などの開口部のデザイン・ボキアブラリーが非常に豊富である。千里山キャンパスの建物群は、まさにその多様さを示している。初期に手掛けた大学院学舎や一高校舎(図6)などは白い壁にスパニッシ



図6 1959年の千里山キャンパス
右下に一高・一中校舎が見える。その左側の樹木が茂るエリアも含めて千里山遊園の跡地である。第1学舎とグラウンド、第2学舎が左上に見える。



図7 第4学舎2号館



図8 第3学舎1号館

ユ瓦の勾配屋根で「学園」の雰囲気を持つ。1950年代以降はタイルをよく用い、第1学舎(図5)、第2学舎では赤褐色のタイル張りの建物が多い。簡文館では柱梁形を表し、要所にモザイクがみられる。第4学舎(図7)は、建設当初はコンクリート打ち放しの柱梁に白い大判のタイル張り、第3学舎(図8)は柱梁は表されず、白いタイル張り…という風である。意匠は一見バラバラなようで、学舎ごと、あるいは建物種別に応じて相互に関連をもつ。単調にならないよう、変化させたと言えるだろう。

「歴史的背景」としては、1950年代から60年代のキャンパス・デザインにおける千里山キャンパスのユニークさを挙げることができる。千里山キャンパスでの村野藤吾の仕事は、戦後の大学整備・拡充に関わるものであった。同じ頃、日本各地で同様の整備が行われたが、その多くはモダニズムの理念や方法に基づき、比較的整然とした建物配

置で、統一的なデザインを採用したものが多く。一方、千里山キャンパスは、一つとして同じ建物は無い。これは、モダニズムに批判的になる1970年代以降の理念や考え方に近いものと考えることができ。同時代の大学キャンパスの建設事例と比較した時、千里山キャンパスのような解答は、非常にユニークな存在と言えるだろう。

村野藤吾は数多くの建築を生み出し、多くの作品が評価されているが、千里山キャンパスのように、約30年にわたって一つの敷地にかかわり続けた事例はそう多くない。千里山キャンパスは土地の買収に不確定な要素が多くあり、全体計画を立案しにくい状況だったと推察できる。また敷地は起伏に富み、キャンパスの高低差は30mほどある。設計するのに楽な敷地ではない。このような難しい条件のもとで、整合性のあるキャンパスに取りまとめたところに村野藤吾の手腕と努力が感じられる。むしろ、その難しさをいかし、デザインの手がかりや特徴へと昇華させ、長い時間をかけて環境形成を図ったと言えるだろう。

おわりに―選定記念シンポジウムの開催

ドコモモ・ジャパンの選定建築物になっても、何か特別なことが起こるわけではないが、ドコモモ・ジャパンから、選定の証に重い金属製のプレートが所有者に贈呈される。2019年12月7日、プレートの贈呈式と、選定を記念した記念シンポジウムが千里山キャンパスのKUシンフォニーホールで開催された。ドコモモ・ジャパンの副代表である山名善之氏(東京理科大学教授)から、池内啓三関西大学理事長へ手渡されたプレートは、建物群の価値を讃え、継承への願いが込められている(図9)。



図9 贈呈されたプレート

贈呈式に先立ち、原田純子先生のご指導で、人間健康学部学生によるダンス・パフォーマンスが披露された。「Mの質感」「丘陵を望みて」と題されたパフォーマンスは、先生と学生たちが実際に千里山キャンパスを歩き、また関連資料を読んで浮んだ情景や建設に関わった人々をイメージした作品である。建築をモノとして分析してしまう建築の世界の人間とは異なるキャンパス理解の表現であり、非常に興味深かった。

山名善之氏は国立西洋美術館がル・コルビュジエの作品群として世界遺産に登録される際に重要な役割を果たされた。ドコモモは、世界遺産の選定等に助言や意見を与える役割もある。それらの知見をもとに、「近現代建築と世界遺産」と題し、山名氏にはドコモモとは何か、そして近現代建築の価値についてお話いただいた。ドコモモ・ジャパン事務局長の大宮司勝弘氏（東京家政学院大学助教）からは、ドコモ

モ・ジャパンの活動と、関西のドコモモ選定建造物の紹介をしていた。橋寺からは、今回選定された建物群の紹介を行った。

贈呈式・シンポジウムに先立って開催されたキャンパスツアーには、予想外に多くの方々が参加してくださった。村野藤吾や近代建築ファンの方も多いが、卒業生の方も参加され、学生時代の思い出のシーンを今日大きく変化したキャンパスの風景に垣間見たり、在学当時は意識せず、ごく日常的だった場所が村野藤吾の作品だったことを再発見したり、それぞれに楽しまれたようである。

近現代の建築は、私たちにとって身近な存在で、あまりにも身近すぎるのか、その価値は意識しにくい。だが、たとえ建設から50年でも、それに応じた歴史があり、設計した人や暮らした人の工夫や思い、記憶が宿っている。それらを継承しつつ、今日的な魅力もあるキャンパスを創造していくことが望まれる。

(1) ドコモモ・ジャパンのホームページにはドコモモの取り組みや選定建築物のリストなどが掲載されている。 <http://www.docomomojapan.com/>

(はしてら・ともこ) 関西大学環境都市工学部